

ソヴィエト構造言語学の系譜 I

岡 部 匠 一

1 定位と展望

ソヴィエトにおける構造言語学の発展は、この国の政治的事情の特殊性もあって、いわゆる西欧、あるいは、アメリカ型の構造言語学のそれとは、かなり異なる経緯をたどっている。まず第一に、アメリカの構造言語学は、1957年の Chomsky の *Syntactic structures* の出現と共に、いわゆる変形文法 (Transformational Grammar) 時代に入り、この年以後、急速に多くの TG 文献が積上げられてきている。また、このアメリカ変形学派 (American transformationalists) の業績は、Chomsky の前掲書の翻訳 (『文法の構造』研究社、1960) も含めて、積極的かつ精力的な紹介導入が行われ、ここ10年ほどの日米の (英語) 言語学は、変形文法一色に塗りつぶされている感がある。

もちろん、アメリカにもバイクによって代表される文法素派 (Kenneth L. Pike, *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. Rep. in one vol. 1967) や、フィルモアの格文法 (Fillmore, C. T., *Indirect Object Constructions in English and the Ordering of Transformations*. *Monographs on Linguistic Analysis*, No. 1, The Hague: Mouton, 1965) によって代表される言語分析の学派もあるがこれらの学派は、現代のアメリカ言語学界の主流とはいえない。

一方、ソヴィエトのばあいには、事情はかなり異っている。まず第一にチョムスキーの『文法の構造』に始まるような劃期的な業績と共に、一挙に、構造主義の名称と実体が共に廃棄され、言語研究の大勢が変形文法一色に塗りつぶされるということとはなかった。ちなみに、アメリカのある学者は、チョムスキーを、言語学の全コースを徒手空拳で変えた巨人人として、ガリレオ、ラボアジエ、フロイトと同列にチョムスキーを置いている。[It has not been given to many people to change virtually single-handedly the whole course of a scientific discipline. One might think of Galileo, Lavoisier, Freud. If one doesn't rank Chomsky with these, it could only be because one doesn't think linguistics as important as physics, chemistry or psychology. Chomsky studied linguistics at the University of Pennsylvania and took his Ph.D degree there. He spent the first part of the fifties thinking and studying and in 1957 published a book called *Syntactic Structures*...Linguistics has not been the same since. (科学研究の全コースを事実上、唯一人で変えることは、多くの人にできることではない。我々は、ガリレオや、ラボアジエ、フロイトのことを思い浮かべるかもしれない。もし、我々が、チョムスキーを、これらの人と同列であるとしないうとすれば、それは、ただ、我々が、言語学を物理学や科学や心理学ほど重要なものだと考えていないためである。チョムスキーは、ペンシルバニア大学で言語学を学び、そこで学位をとった。彼は、50年代の前半を思索したり研究したりしてすごし、1957年に、*Syntactic Structures* という本を出版した。……言語学は、それ以来、以前の言語学ではなくなった。

〔(下線筆者) G. Wilson (ed.) *A Linguistic Reader* (1967) p. xx.〕

スターリンに象徴される政治の独裁はソ連のものだったが、言語学のそれは、どうも、現在のアメリカ合衆国における変形文法といえよう。

それでは、アメリカ派構造言語学のように、1957年とか60年のある日突然の名称と、それに相即の実体内容の変容を伴う新言語学の絶体王制の確立がソ連ではみられなかったのだろうか？ ソ連における構造言語学の史的展開はいかなるものであったのか、また、ソ連における構造言語学の現状の scope and extent はいかなるものであるのか？ この小稿は、このテーマへのささやかな approach であり、Langendoen の成書 (*London School of Linguistics*) に倣う〈Soviet School of Linguistics〉への試みの一環をなすものである。

2 史的展開

ソ連における構造言語学の史的展開に限らず、アメリカ合衆国の構造言語学のそれのばあいにも同一だが、すべて構造言語学の始まりを、ソスユールに求め (Ferdinand de Saussure (1857-1913) *Cours de Linguistique Générale*, 1922³), 'dans la langue il n'y a que des différences...sans termes positifs' (言語には、差異しかなく、実体をもつ要素はない) を援用して、言語を音声と意味の相互規定、依存の有機構造の体系をなすことの確認から始めることは、愚しくもあり、また書き手と読み手を退屈させる悪しき慣行である。ソスユールを割愛すれば、ブラーグとコペンハーゲンの言語集団の構造主義に不当にかかずらうこともなくなる。我々は、現在のソヴィエト構造言語学を支える太い幹と根を探りさえすればよい。

ソヴィエトにおける広い意味での構造的な言語研究の始まりを、我々は、ロシア本土に限れば、前世紀の終りから今世紀の始めにかけて活躍したフォルトナートフ (Фортунатов Ф. Ф. 1848-1914) とボドワン・ド・クルトネ (Бодуэн де Куртэнэ 1845-1929) にみることができる。彼らは、この当時に支配的だった、青年文法学派の言語研究の原理に対して、体系としての言語観を打ちだした。彼らの言語観察の原理は、時間の流れにそった言語の変遷の探究を超えて、言語の態様の分析を求めるものであった。

ボドワンのいう言語の状態とは、ソスユール的な言語観とは対蹠的に、時間軸にそって切った通時体系と、平面的に、ある特定時点を静止して横に切った共時体系が相互に規定しあうものとして把握された。なぜならば、「言語の静的状態は、言語の動的な状態、言語のダイナミクスの特別なばあいなのだから」^①

ボドワンによれば、言語体系は、静的、および動的な法則性に支配される三つの対等な下位組織を含んでいる。すなわち、音組織、語形組織、言語表現組織である^②。ボドワンは、また、ソスユールが、langue と parole の概念の創始以前に、基本的な構成素とカテゴリーの、ある一定の複合体としての言語と、連続的に繰返される過程としての言語を分けて考えた。ボドワンのこの言語観の独創性は疑いを容れない。それゆえ、彼は、はっきりと、ソスユールの構造主義を先取りしたといえよう^③。ソスユールは、かの有名な講義をボドワンに30年も遅れて行ったのだから。ソスユールの『言語学原論』[Ferdinand de Saussure (1857-1913) *Cours de Linguistique Générale*] は、彼の死後、二人の弟子 Charles Bally と Albert Sechehaye によって編纂され、第1版は1916年、第2版は1922年に出版されている。

もちろん、ソスニールとは異り、ボドワンは、自分の言語観を、〈講義〉の形にまとめている。このためでもあろうか、彼の『選集』も編纂され^④、彼の人と言語学についての論考も出版されている^⑤にもかかわらず、ヨーロッパの言語学者の間でさえ、ボドワン評価の気運が今一つたかまらないのは残念である。文脈は違うが、我々は、「現在を否定せず過去との接触を保つべきであり」^⑥、「学ばずして伝統を否定し、去年よりもまえのものを読まないような無智な進歩的学徒になるべきではない」^⑦

それゆえ、たとえば、言語の意味内容の形式化にとって、最も基本的なカテゴリーである〈音素〉、〈型態素〉の概念が、ボドワンによってつくられたという事実は、ほとんど知られていない^⑧。しかし、もちろん、ロシアの国内では、モスクワ学派の開祖、フォルトナートフと、カザン学派（のちに、ベテルブルグ学派）の鼻祖のボドワンの影響は、大きなものであった。この両学派は、言語の形式的研究をめざして、多くの学者を生みだした。また、彼らは、革命後の広い意味でのソヴィエト言語学を最も興味ある学問にしたし、また彼らは、マルの言語学説がソヴィエト言語学界を支配していた時代でさえも、ある一定の理論的立場を堅持することができた。ソヴィエト言語学の孤立時代にあって、このような独自の形式的言語研究の伝統がロシア本国にあったことは、ひじょうに重大な意味を後代の言語研究（者）に対してもってくる。

フォルトナートフは、文法形式の研究に際して、すでに統計的方法を使い、ボドワンも、ロシア語の子音組織の研究に際して、統計的方法の使用を推している^⑨。

フォルトナートフやボドワンのような、言語研究の厳密な方法の開拓者なくしては、H. Н. Дурнова, А. М. Пешковский, З. Д. Поливанов, М. Н. Петерсон やその他の学者の文法についての考え方は、ほとんどありえなかったであろう。これらの学者たちは、言語事実を形式的規準をもとにして、規定し、とりだし、分類しようと努めたのであった。そして、また、ボドワンとフォルトナートフなくしては、主として音韻問題に関心をもった新モスクワ学派の考え方も、またほとんどありえなかったであろう。

ここで、ロシアにおける言語研究のフォルマリズムについて一言いえば、ロシアにおける言語研究の形式主義は、まだ構造主義への傾斜をみせることなく、構造主義の原初的な形態を見せているだけだった。なぜならば、記号体系としての言語という概念は、まだ体系的な基礎づけがなされていなかったからである。もちろん、すでに述べたように、ボドワンの言語観は、体系としての言語の考察にひじょうに近いものである。ボドワンによれば、‘言語は、多くの任意の記号から成っていて、これらの記号は、最も多岐的なやり方でお互いに結ばれている’、(*Szkice Językoznawcze* I Warszawa, 1904, p. 32) ボドワンはまた、共時面に存在する記号を、ソスニールにおけると同様に、‘任意’なものとして規定している^⑩。

ブラーグ言語集団の創始者、N. S. Troubetzkoy, R. Jakobson, С. Карцевский もまた、彼らなりのあり方で、ロシアのフォルマリズムの言語研究の流れの推進者だった。彼らはまた、ヨーロッパにおける構造主義の最初の唱道者でもあった。ツルベツコイは、自分の音韻論の考えを、ボドワンの理論から発展させたと述べているし、また、ヤコブソンは、構造主義は、フォルトナートフのフォルマリズムから出発していることを示唆している^⑪。

3 構造言語学の発展

上に述べたような史的な展開、ボドワンによるソスユールの予期や、言語におけるロシアフォルマリズムの構造主義への準備を経て、いわゆる我々が理解する西欧、アメリカ型の構造言語学は、ソ連では、1950年代の半ばから始まることになる。すなわち、1956年にアカデミーの言語学研究所の機関誌、『言語研究の諸問題』（Вопросы Языкознания）は、第20回党大会の決定を受けて、構造言語学に関する集中的、かつ正鵠をえた討論を行うことを決定した。[‘О некоторых актуальных задачах современного советского языкознания’, <Вопросы языкознания> (1956)4 ; 3-13.]

この決定は、もちろん、それまでのソヴィエト言語学の伝統に背馳するものであった。この時点までは、ソヴィエト言語学にとって、構造言語学は、ブルジョア的、観念的似非科学であり、論じられるよりもまえに、まず正体をあばかれるべきものであった。それゆえ、この時期以前、1925年以来マルの＜新言語学＞がしょうけつを極めていた時代には、構造言語学を真面目に批判の対象として取りあげた論文は、全部で3篇しかなく、チョコババのグルジア語についての論考もその一つであった^⑩。

しかし、このように構造言語学の批判的摂取の姿勢がソ連の言語学界に欠除していたことは、西欧の構造言語学の源流の文献が、ソ連の言語学界に知られていなかったためではない。なぜならば、すでに、1930年代の前半に、Saussure の *Cours* や、Sapir の *Language* の翻訳がソ連ではすでに出版されていたのだから。（Сосюр, <Курс общей лингвистики> М. 1933. ; Сепир, <Язык> М.-Л. 1934.）それは、むしろ、1925年に、ソ連の御用言語学となった Мартин の＜新言語学＞の支配に毒されたソ連の言語学界が、構造主義の説く言語の抽象性と言語体系の自完性に、ブルジョア的発想の抬頭を嗅ぎつけたからであろう。マルの＜新言語学＞では、言語は、その社会的関連において考察され、マルキシズムの概念という上部構造に従属させられていたのだから^⑪。

しかし、このマルの＜新言語学＞のドグマの支配も、孤立はしていたが、ある研究分野では、避けられないまでも弱められていた。たとえば、比較言語学者 Вулаховский (1888-1961) は、はじめはハリコフ、のちにキエフ大学の教授であったが、モスクワにいた Виноградов, Аванесов, Ленинградにいた Ворковский のように迫害の脅威を身近に感ずることはなかった。それゆえ彼は、1930年代にあっても、比較文法のしっかりとした教科書を出版することができた [<Исторический комментарий к русскому языку> I. II (1938)]。この本は、現在でも、18世紀から20世紀にかけての最善の『歴史文法』の一つである。

一方、30年にわたるマル言語学の支配の期間中、ヴィノグラドフたちは、ロシア語プロパーの研究に自らの身を潜めていた^⑫。しかし、それにも拘らずヴィノグラドフは、1947年に、彼の有名な著書『ロシア語』（<Русский язык>）を出版し、ソヴィエトの学者や古い時代のロシア人学者だけでなく、この問題についての権威ある西欧の学者を引用したときに、彼はすさまじい攻撃にさらされた。彼は、「真のマルキストでないのみならず、マルの言語学も理解していない」^⑬と批難された。しかしすでに、マル支配の雪融けの徴候が見えていたので、ヴィノグラドフの自己弁護は成功し、自分の誤りに軽い遺憾の意を表明しただけ

で、モスクワ大学教授の地位を失うには至らなかった。これは、1942年の第2次大戦の勃発と共に、ソ連内外のスラブ民族の歴史的な運命共同体思想が問われることになり、この点からも、比較言語学をはじめとする西欧言語学研究への締めつけが緩和されてきたためである^⑧。ショールとチェモダーノフは、共著の『言語学入門』(1945)の中で、次のように述べている。‘密接に関連している言語が古い一つの統合的言語から、後者が分化することによって発達してきたという可能性は排除できない。このようなやり方で、たとえば、東部スラブ語やロマンス諸語が発達してきた’^⑨。

このことばは、明らかに、マル学派の理論に背馳する。マルは、世界のすべての言語は、彼のいう四つの要素 *sal, bel, yon, rosh* から発達してきたとする。すなわち、密接に関連している言語、親縁関係にある言語が、そこから分岐発展すべき、古い統合的言語、いわゆる祖語を認めない立場をマルはとる^⑩。

しかし、大戦と共に始った言語学の雪融けは長くは続かなかった。大戦後すぐに、マル学派は、唯一の御用学派としての地位と力を新たにした。

しかし、1950年の1月から5月にかけて、厳密には、コーカサスの言語の専門家チコババによって始められ、スターリンが続いて口火を切った1950年1月から5月にかけて、ブラウダ誌上で行われた言語学論争によって、マルの死後15周年を経て始めて、マル言語学を正すことが、ソヴィエトの言語学者に求められた^⑪。もちろん、マルの新言語学と言語の起原に関する彼のヤフェツト理論が支配する30年間の才月の間に、ソヴィエト言語学の生産的発展に貢献し、現代のソヴィエトおよび西欧言語学の批判に耐える研究がなかったわけではない^⑫。しかし、いずれにしても、マルの言語学が、ソヴィエト言語学界の沈滞と諸外国での不信をかったのは疑うべくもない。

第20回党大会の決定を受けて、1956年に、『言語研究の諸問題』誌が 構造言語学の討論を、編集者の呼びかけとして発表したとき、スターリンは、積極的に、ブラウダ誌上を通じてこの言語学の討論に加った^⑬。それは、ブラウダ誌上で1950年の5月から6月にかけて行われたものである。

スターリンが、ソ連言語学史上有名なこの言語学論争に招かれずして加ったのは、一つには、彼は、青年時代に少数民族について論文を書いたことがあり、ふつうの政治家よりも、言語の問題を知悉していたからである^⑭。今一つの理由は、マルのいう言語の上部構造説がある範囲の専門家と教養ある人々によって受入れられていなかったもので、スターリンは、このような言語学の根本問題に、明確なイデオロギー的立場を打ちだすことを欲していたのであろう。もちろん、マルクス主義の理論家として、言語学の根本方針の決定に‘最後のことば’を吐きたいというスターリンの自負もなかったとはいえない。もちろん、論争の先鞭をつけた、カフカスの言語の専門家チコババのスターリンに対する影響は無視できないものがあつたことは確かであろう^⑮。いずれにしても、1950年6月20日のソヴィエトの言語政策の急激な変化はよく知られているが、^⑯ これはスターリンの功績とされてよからう^⑰。この結果、ソヴィエトの言語学の諸機関においては、人事および組織の変更が行われ、同時に Junggrammatiker をはじめ、いくつかの西欧の言語学の研究書の翻訳によって、ソヴィエト言語学界の孤立が打破された^⑱。しかし、ベルンシュタインが、1954年の『言語研究の諸問題』誌上で、今後のプログラムとして、『スラブ語比較文法』の作製をうたい、「いくつかの西欧の作品の中に、我々は、価値あるたいせつな考察をみいだす」^⑲ と述べたとき、ソヴィ

エトの言語学者は、おそらく始めて、西欧の構造言語学について好意的な意見を述べたのではあるまいか。もちろん、この時代には、反動の揺り返しは避けるべくもない。例えば、ジェスニーツカヤは、青年文法家の精神を体して書いた作品の中で、コペンハーゲンの構造言語学を厳しく批判した^㉔。

また、現在モスクワ大学の教授である若きアフマーノヴァやグフマンは、アメリカ構造言語学を激しく攻撃している^㉕。

しかし、ソ連の言語学文献の一般の消費者にとっては、構造言語学の研究書に直接ふれる機会は、ほとんどなく、また最近にいたるも、ソ連における西欧の構造言語学文献の翻訳と輸入量は十分とはいえない。

それはともあれ、チコババに励まされたスターリンが、マルの独裁的なソ連言語学に対する支配に断を下し、ソヴィエト言語学の理論の準線には、歓迎すべき徴候が表われた。しかし、ソヴィエトの言語学は、さらに、このスターリンをも否定止揚して、西欧の構造言語学と積極的な交配 (cross-fertilization) をめざすことになる。

以上のような経緯を経て、1956年から初めて、ソヴィエトの言語学が、ロシアフォルマリズムの言語研究の伝統を引きついで、いま我々が理解する意味での構造言語学をその研究計画に組みこむことになったわけである。しかし、だからと言って、ソヴィエト言語学が、これまで彼らに知られていない未知の研究領域に大胆に突き進んでいったわけではない。ソヴィエト言語学は、むしろ発見者としての権利を主張しようような分野、一ロシア語プロパーの伝統的方法による研究に、以前と同じようにいそしんでいたといえよう。

もちろん、これには異論もあって、レホルマツキーは、構造言語学とか構造主義の概念は、まず最初にソ連で用いられたと主張する^㉖。すなわち、1939年のポスの論文 (『構造主義の展望』(H. J. Pos, 'Perspectives du structuralisme', *Travaux du Cercle Linguistique de Prague*, 8. 1939) が表われるまえに、書きことばを持たないソ連領内の少数民族のためにアルファベットをつくる際に、ロシア語の正字法の改正^㉗の準備の際に、また、外国文字のロシア語への転写規則をつくりあげる際に、構造主義は使われてきたと彼はいう。しかし、これでは、彼のいう、また、使う構造主義という術語は、今日のそれとは、その意味内容を異にするし、また、残念なことに、レホルマツキーは、自分の論拠を文献によって証してはいない。

それはともあれ、すでに述べたように、第20回党大会の決議によって、ソ連の言語学は、西欧言語学や革命前の言語学の成果も、それらが、はっきりと反マルキシズム的な性格を帯びていないかぎり、あらゆる面で発展させる端緒を与えられることになった。かくして、これまで反マルクスのとらく印を押されていた構造言語学とその方法の、真の意味での検討と受容のためののろしがあげられたのである。構造主義は、その始祖、フォルトナートフとボドワン・ド・クルトネの土地によみがえった。

1956年の第20回党大会の決定のあと4ヶ月後には、早くも、『言語研究の諸問題』誌上には、編集部の手に成る今後の研究方針を声明する論説、「ソヴィエト言語学のいくつかの問題」が載せられたことはすでに述べた。

この論説は、ソ連の言語学の学術政策上、決定的な価値をもち、現在振り返ってみても、ソ連構造言語学の基本的文献の一つとみなさるべきものである。

この論説で提案されていることは、純粋に言語科学的な視点をもった具体的な研究を助けとして、構造主義の一般的特性と、その多様な方向を研究し、また、その多様な方向をもつ

た分野の起原をも考究することが提案された。

ここで興味あるエピソードは、1955年の9月、ベルグラードで、スラブ語学者の国際会議が開かれたときに、ソ連の学者たちは、ヴィノグラドフに率いられて、スラヴィストの国際会議に初めて参加した。ところが、次の1958年にモスクワで予定されていたスラブ語学者国際会議には、ソ連の学者は、当然、比較スラブ語学の成果を引っさげてくると考えられていたが、事実はまったく予想に反していた。狭いスラブ語研究の分野は影を潜め、より規模雄大な印欧諸語への関心が打ちだされた。この劇的な変化の背景は、おそらく、さきに述べた、『言語研究の諸問題』の、研究方針表明の論説に続いて表われた、同年の同誌の次号(5号)にシャウミヤンが寄せた論考、『構造主義の本質』^⑧にある。

この論文の中で、彼はプラーグ、コペンハーゲン、アメリカの、それぞれの構造主義を研究する必要性を説き、これらの構造主義の各流派は、‘言語学の歴史における新しい段階’を表していると述べている。言語学の歴史の新しい段階の研究は、古い段階への遡及を伴う。古い段階に遡る研究は、印欧祖語の比較研究ということになる。

それはともあれ、シャウミヤンやその他の学者たちの研究と啓蒙によって、構造(主義)言語学は、ようやく、ソ連においても、科学的に正当かつ必要欠くべからざる学問であるとされた。構造主義は、ソ連においては、このあと、多面的な学際的関連において、自動翻訳や情報理論^⑨に対して、大きな意味をもちうることとなった。

シャウミヤンの論考にきびすを接して、多くの構造(主義)言語学に関する論文^⑩が、『言語研究の諸問題』誌上に表われた。それゆえ、このアカデミーの言語研究所の専門誌は、1956年、1957年には、完全に構造主義の論文に覆われることになった。

そして、さらには、構造主義を超えて、現代言語学の個別的問題が、ソ連の言語学者の射程に入り、研究の視座にすえられるようになってきた。たとえば、言語の多様な層の記述の際の Isomorphism の問題、構造言語学の方法を、言語事実の internal reconstruction や、typology の研究に使うかどうかの問題、構造言語学と数理言語学との関係などが今後の研究対象とされることになった^⑪。-Oct. 31, 1975.

Notes

1. 「自伝的注解」 in 《Критико-биографический словарь русских писателей и ученых》(С. А. Венгерстов 編) V., 1914. c. 34.

フォルトナートフのボドワンと似た考え方については、Петерсон, М. Н., ‘Академик. Ф. Ф. Фортунатов’ in 《Фортунатов, Ф. Ф. : Избранные труды》 I. М. 1956, c. 15.

フォルトナートフの共時と通時についての考え方は、Щерба, Л. В., ‘Ф. Ф. Фортунатов в истории науки о языке’ 《Вопросы языкознания》(1963) c. 92.

2. Бодуэн де Куртэнэ, И. А., ‘О связи фонетических представлении с представлениями морфологическими и семасноложическими’ in 《Избранные труды по общему языкознанию》 П. М. 1963, c. 163 f. —, ‘Подробная программа лексики в. 1876-77. учебном году.’ *ibid.*, I. c. 101 f.)

3. Бодуэн де Куртэнэ, И. А., ‘Некоторые общие замечания о языковедении и языке’ in 《Журнал министерства народного просвещения》(1871) февр. c. 315.

4. 《Избранные труды по языкознанию》 I. П. М. 1963,

A. Baudouin de Courtenay: *Anthology*. Trans. & Ed. with an Intro. by Edward Stan-Kiewicz.

5. Щерба, Л. В., 'И. А. Бодуэн де Куртэнэ и его значение в науке о языке', «Русский язык в школе», 1940, Nr. 4, с. 84-85., 'И. А. Бодуэн де Куртэнэ и его учение о языке', *ibid*, Nr. 2.

6. '...and without denying the present, we have tried to keep some continuity with the past.' [Hungerford, *et. al.* (eds.), *English Linguistics : An Introductory Reader*, 1970, Preface ix.]

7. 'The truly reprehensible modern pedagogue is not the learned traditionalist, ...but the ignorant progressive who rejects tradition without studying it and reads nothing earlier than last year.' (*ibid.*, 'Introduction' p. 3.)

8. Зиндер, Л. П., 'Фонология и фонетика' «Теоретические проблемы советского языкознания», М. 1968, 193 f.

9. Papp, F., *Mathematical Linguistics in the Soviet Union*, Hague; Mouton, 1966 (*Janua Linguarum* XL p. 16.; Вудуэн де Куртэнэ, И. А., 'Отрывки из лекции по фонетике и морфологии русского языка', «Филологические записки IV-V» (1881) с. 1-32.

10. Baudouin de Courtenay, *Vermenschlichung der Sprache*. Hamburg, 1893, S. 21.; Леонтьев А. А., «Общелингвистические взгляды...» с. 119.; Щерба Л. В., «Избранные работы» с. 85-96.

11. Jakobson R., 'Notes autobiographiques de N.S. Troubetzkoy', in Troubetzkoy N.S., *Principe de Phonologie*, Paris. 1949, S. XXVIII.; Щаумян, С. К., 'Сущности структурной лингвистики' «Вопросы языкознания» (1956) 5 : 38-54.

12. Реформатский (Ред.), «Структурное и прикладное языкознание» М. 1956, с. 23-24.

13. マルの<新言語学>については, 拙稿 'Marxist structure into Marxist Structure : -An Inquiry into the Linguistic Controversy of 1950' 『人文科学論集』(昭50) 10 : -を参照されたい。

14. *Current Trends in Linguistics* I. [(ed.), T. Sebeok] The Hague; Mouton 1963, p. 7.

15. Агапов & Зелинский 'Нет, это не русский язык, О книге Проф. В. Виноградова' «Литературная газета» 59 (2374) ноябрь 29, 1947, с. 3.

16. *Current Trends in Linguistics* 1963, p. 95.

17. Шор, П. О., & Чемоданов, Н. С., «Введение в языкознание» М. 1945 с. 207-208.

18. *Current Trends in Linguistics*, 1963, p. 96.

19. H. Jachnow, 'Der Structuralismus in der Sowjetischen Sprachwissenschaft' in Sebastian Schaumjan, *strukturelle Linguistik* (Tr. by Wolfgang Girke & Helmut Jachnow). München, 1971, S. 11; Виноградов, В. В., 'О преодолении последствий культа личности в советском языкознании' «Теоретические проблемы современного советского языкознания», М. 1964, с. 10.

20. (Ред.), 'Пути развития советского языкознания' «Вопросы языкознания» 1957. 5 : 15.; Сердюченко Г. П., 'О Некоторых философских вопросов советского языкознания' «Теоретические проблемы современного советского языкознания» М., 1964. с. 125 f.; Федосеев, П. Н., 'Некоторые вопросы развития советского языкознания'. *ibid.*, с. 35 f.

21. И. В. Сталин, «Марксизм и вопросы языкознания» М. 1950.

22. *Current Trends in Linguistics*, 1963, p. 96.

23. 'A.S. Tschikobava, a Caucasian philologist, who happened to quarrel with powerful

Marrists and saw his career threatened. Being a good specialist in Caucasian languages, Tschikobava was able to uncover the nonsensical character of the Marrist "etymologies" and prove it to his great fellow Georgian. [V. Kiparsky, 'Comparative and Historical Slavistics' in *Current Trends in Linguistics* I. : *Soviet and East European Linguistics*, 1970. p.96.] もちろん 'his great fellow Georgian' とは Stalin のことである。

24. *Current Trends in Linguistics* I, 1970, p. 95.

25. *Ibid.*, p. 98.

26. 翻訳された西欧の言語学文献を翻訳年次と共に列挙すると,

1952 : André Vaillant, *Manuel du Vieux Slave* (Paris, 1948).

E. Bourciez, *Eléments de linguistique romane* (Paris 1946).

J. Friedrich, *Kurzgefasste Grammatik des Hettitischen* (Heidelberg 1940).

1954 : H. Pederson & G. Lewis, *A Concise Comparative Celtic Grammar* (Göttingen, 1937).

Antoine Meillet, *La Méthode Comparative en Linguistique Historique* (Oslo, 1925).

1955 : Ch. Bally, *Linguistique générale et Linguistique Française* (Berne, 1944).

E. Benveniste, *Origines de la Formation des Mots en Indo-européen* (Paris, 1935).

1960 : Hermann Paul, *Prinzipien der Sprachgeschichte*, 5th ed. (1937).

27. Бернцтэйн, С. В., 'Основные задачи, методы и принципы сравнительной грамматики славянских языков' *《Вопросы языкознания》* (1954) 2 : 49-67.

28. Десницкая, А. В., *《Вопросы изучения родства индоевропейских языков》* М. 1955.

29. Ахманова, О. С., 'О методе лингвистического исследования у американских структуралистов' *《Вопросы языкознания》* 1952, 5 : 92-105. Гухман, М. М., 'Против идеализма и реакции в современном американском языкознании.' *《Известия ОВЯ》* 11,4 (1952) : 281-294.

30. Реформатский, А. А., 'Что такое структурализм' *《воп. язык.》* (1957) 6. 25 f.

31. 'Nach der Revolution 1917 ist in Rußland eine neue Orthographie eingeführt worden. Die heute in der Sowjet-Union erscheinenden Bücher folgen meistens dieser, während die Emigration im Auslande vielfach noch an der alten Rechtschreibung festhält. Die neue Rechtschreibung kommt der Aussprache in mehreren Punkten näher als die alte', Erich Bernerker. *Russische Grammatik*, Berlin, 1947, S. 15.

32. Шаумян, С. К., 'О сущности структурной лингвистики' *《Вопросы языкознания》* (1956) 5 : 38-54.

33. Ляпунов, А. А., & Реформатский А. А., 'Основные проблемы машинного перевода', *《Вопросы языкознания》* 5 : 107-111 ; Кулагина, О. С. & 'Мельчук, И. А., Машинный перевод французского языка на русский', *ibid.*, 5 : 111-121 ; Зиклов, Л. И., 'Границы применимости машинного перевода', *ibid.*, 5 : 121-124.

34. Адмони, В. Г., 'Развитие синтаксической теории на западе в XX в. и структурализм' *《Воп. язык.》* 6 : 48-64. ; Сюнго-чжан, 'Обзор структурального направления в лингвистике', *《Воп. язык.》* (1956) 5.

35. 'О некоторых актуальных задачах советского языкознания' *《Вопр. язык.》*, (1956) с. 9-10.

Resumé

This paper is an attempt at plumbing into the development of structuralism, specifically structural linguistics in the Soviet Union.

Abaev has it that the development of linguistics in the Soviet Union is roughly divided in 3 periods. ('Lingvističeskij modernizm kak degumanizacija o jazyke', *Voprosy Jazykoznanija*, 1965, vol. 3, p. 24)

1. From the rise of Marrist cult to the so-called linguistic controversy in the 50's
2. From Stalin's intervention of the controversy to the thawing of Stalinist cult with subsequent rise and flowering of structural linguistics.
3. Present-day linguistics in the Soviet Union

The present writer hastens to add that Abaev's division of the period was amply modified in words and frames with his idea of the development of the Soviet linguistics.

The main concern of the present paper is with the 2nd period of the above division, that is, with the period of the decline of Marrist theory of his 'new linguistics' with subsequent rise of structural theory of language in general and structuralist studies of languages in particular.

It is a commonplace statement to maintain that structuralism takes its rise in de Saussure's idea of structurally patterned design of linguistic facts. Ferdinand de Saussure conceives language as a system and stated that 'dans la langue il n'y a qu'une différence'.

There are several variant approaches to probe into the origin of structural linguistics. One of the variants is to make a cursory mention to Saussure's dichotomy of 'langue' vs 'parole' along with methodological bipartition of 'synchronie et diachronie', and goes on to elaborate on Prague and Copenhagen structuralism while making full use of and frequent reference to their respective *Travaux* i. e. to *Travaux de Cercle Linguistique Prague*, and to *Travaux de Cercle Linguistique Copenhagen*.

A theory and practice of tracing back structural linguistics to Saussure's *Cours de Linguistique Générale* (posthumously edited by two of his disciples, Antoine Meillet and Albert Sechehaye) is and has been overworked to become a stock and stale statement in the books and courses for history of linguistics.

As all the roads do not necessarily lead to Rome, so all modes of structural linguistics do not stem from Saussure nor from Prague and Copenhagen school of structuralism.

Perusal of history of the Soviet linguistics shows that Baudouin de Courtenay (1845-1929) seems to precede Saussure by some thirty years in the inception of structuralist idea of language with concomittant binary system of phonemes.

Soviet structural linguistics is also peculiar in that this discipline has not undergone any sudden disruption of form and contents in the mid 50's when the American counterpart has seen a sea change.

With the appearance of Chomsky's *Syntactic Structures* (1957) structural linguistics was doomed. The very nomenclature of structuralism and all was virtually wiped away from the pages of scholarly publications in the United States. It is as if one morning one awoke to find structural linguistics gone, and Chomskyeian transformational studies flooded the whole linguistic scene of the United States.

As stated earlier, the Soviet structuralist school is said to have begun with Baudouin de Courtenay and Fortunatov (1848-1914), and Soviet linguistics was very lucky not to have suffered from any such drastic and detracting experience in its conception of structuralist studies and its subsequent excution of these.

It is of course the way of all flesh and disciplines that maturity and later developments have entailed conflicts and complications. Soviet structural linguistics has given birth to such variegated applied branches as mathematical linguistics, computational linguistics and machine translation.

Thus the tradition and trend of structural linguistics Baudouin de Courtenay had founded at about the turn of the century became a full-fledged theory and practice of the Soviet structural linguistics.

However at about 1920 Marr suddenly broke into the Soviet linguistic scene with his authoritative *new linguistics*, along with the notorious Japhetic theory for the language which claimed to derive all the languages of the world from 4 basic elements, i. e. *sal*, *ber*, *yon* and *rosh*.

Marr's influence was of such a deep-seated and devastating nature that Binogradov was severely accused for his 'bourgeois idea', when he published his *Russian language* in 1947 in the spirit of Western structuralist idea and practice. But the thawing symptom has already been descried in the air in the Soviet linguistic scene. He was lightly acquitted of his guilt when he casually extended his apology for his antimarxistic mistakes. He did not lose his professorship at Moscow State Univeresity.

The seemingly abrupt but unequivocal and unmistakable thawing of Marrism is on June 20, 1950, when Stalin brought out his famous article 'Maksizm i voprosy jazykoznanja' in *Prawda*, the organ daily of the Soviet Communist Party.

The reason of his intervention lies in the fact that he was of Georgian descent, and in his youth he dealt with the problem of minor peoples which was inextricably linked with the problem of their languages. Another reason is that Tchikobava, who is a specialist of Caucasian, was at the time quarrelling with indomitable Marrists and able to prove Marrist fallacy in the matter of etymology. Encouraged by Tchikobava's precedence Stalin sprang at the opportunity and demolished Marrist theory of language as class-bound and overstructure of society. Stalin gave a full rehabilitation to comparative-historical linguistics with special stress on comparative studies in Slavics.

On the spur of Stalin's intervention there appeared a number of articles which were conceived in Western structuralist theory and practice, while great changes were taking place in personnels and institutions in the Soviet linguistic scene. For instance Binogradov

became head of all Soviet linguistics and of the Institute of Russian language. Marrist periodicals, like *Jazyk i Myslenie* was abolished and replaced by such new periodicals as *Voprosy Jazykoznanija*. This linguistic journal was founded in 1952 and no one can deny high standing accorded to this journal today in the linguistic world both at home in the Soviet union and abroad in the West.

In 1956 the editorial board of *voprosy Jazykoznačnaja* announced that the study of Western structural linguistics be seriously undertaken for assimilating the principle and practice of this linguistic discipline. This article, entitled 'O nekotorych aktual'nych zadačach sovetskogo jazykoznanija' is to be regarded as a fundamental document in Soviet structuralist trend toward linguistic idea and execution.

And in the same year S. K. Schaumjan responded to this appeal with his 'O suščnosti strukturnoj lingvistiki' in the pages of *Voprosy*. This paper gave a positive evaluation to structuralist trends home and abroad, and other scholars of structuralist persuasion in the Soviet union lost no time in following Schaumjan with their respective structural studies, most of which appeared in 1957 issues of *Voprosy*.

Salient characteristics of structural linguistics in the present day Soviet Union is that Soviet structuralists are not concerned so much with the internally self-contained and patterned structure of language as with language in its socio-cultural context in the broader sense of this term.

Another no less remarkable characteristics of the Soviet school of structuralism is that in the Soviet Union in diametrical contrast to the United States there has never been any unproductive disruption of the name and substance of structural linguistics as seen from Harriss' *Structural Linguistics* to Chomsky's *Syntactic Structures*.

The appearance of Schaumjan's applicational grammar, the so-called Soviet version of transformational grammar, has never impinged on Soviet structural linguistics. On the contrary Schaumjan's approach and other exact methods of linguistic studies are being harmoniously incorporated into the body corporate of structuralist principle and practice of linguistic studies in the Soviet Union.

It is now high time that we went out of our westernized frame of reference to do serious and scrutinizing researches on the past and present of the Soviet school of linguistics in its organic totality.